

史料紹介

組踊「忠孝夫婦忠義」について

當間一郎

この組踊は、與那霸政牛氏所蔵本『組踊集』第一冊のみにおさめられている写本で、他の現存写本にはまったく見られない。その点できわめて貴重な組踊といえよう。

第二冊には「大南山」という、若い男女の愛をあつかった、これまたタイトルから見て、この写本にのみおさめられている組踊なのである。第一冊には、「忠孝婦人」「二山和睦」「高山敵討」「本部大主」の四番がおさめられている。

この二冊の写本は、最初、宮城嗣周氏が所持しておられたが、組踊は與那霸政牛兄へ渡した方がよいとのことで、宮城氏は躊躇することなく與那霸氏へ届けられたということを聞いたことがある。そのようなきさつで、この二冊は、與那霸政牛氏所蔵になつたのである。私がこの二冊の写本を見たのは昭和四十四年八月で、その日にお借りしてコピーをとつたのである。複写機の出はじめた頃で、B4規格のコピー用紙が最高の大きさで、この写本をとるときも上下がぎりぎりか、上をやや余裕を持たせて下の方を一字ぐらい切れるような取り方をしたことをおぼえている。

文字の切れたところは、写本とあわせて手書きをしたのも多い。

この組踊名は、伊波普猷著『校註琉球戯曲集』（昭和四年十月、春陽堂）の凡例に見えていたのが唯一の記録である。伊波氏が館長をつとめていた沖縄県立図書館の郷土資料室にでもはいつていた『組踊集』に、お家流の筆法で記されていたにちがいない。今日まで翻刻したものはないと思つていたら、昭和四十年九月に首里の三ツ星印刷から発行されている『沖縄郷土古典芸能組踊全集』の、最後にこの組踊がはいつているのを確認しておどろいた。とびらに「忠孝夫婦忠義」とあるので、與那霸先生の翻刻だろうと思つていて。しかし、その台本をよむと、まちがつた読み方をしたところが多く見られる。そして読みのはつきりしないところは、草書体にしてごまかしの表記にしてある。その二、三をとり出してみたい。

写本翻刻

『組踊全集翻刻』

与座の大主

殊に大勢の中に只
一人取尋遂まらん

殊に大勢の中に只
一人 い進まらん

与座出羽口説

おもへわすれと古

郷の君や妻子の佛

を

同人道行子持ふし

御八幡大菩薩奇特

よあもの

乙樽

御八幡大菩薩特

の君や妻子の
にあもの

手はなさん玉金一
人子

手はなさん玉金一
人子

この組踊は、最後の部分が切れて台詞がない。「大南山」は前半部分がまったく残らず、この「忠孝夫婦忠義」は、結末部分が欠落している。おそらく與那覇氏へ渡るまえに、欠落していたのではないかと想像している。全体は流れがよくない。時間をかけて読みこなし、総合的に検討を加えなければ、今後、上演を考えていく場合に、むずかしい面が多く出てくるかも知れぬ。

この長編組踊の作者が、どのような人物であるか、まったくわからない。したがって、創作年代も今のところはつきりしない。他の組踊作者と同様、地理にくわしく土地感があり、多くの地名を出して、登場人物の行動をスムーズにさせている。南山と久志を両極において、奥辺土、今帰仁、名護世富慶、喜瀬幸喜、許田、多幸越路と沖縄本島北

両者を比較すると、読み方が異なることがわかると思う。ごく一部をぬき出したが、最後までくわしく見ると、相当な読みあやまり、あるいはごまかしともとれる草書体がはいつている。また、写本では、「真栄里の台詞」の次に「母」として台詞があるのを、真栄里の台詞につづけて母の台詞もつなげて、意味が通らない台詞をしている。與那覇氏なのか他の人なのかわからないが、翻刻して公にしてあるのは好ましくないであろう。『組踊全集』のままでは、上演にむけての台本研究にも役立たないといわざるをえない。

部を取り込み、普天間村御宮を中間点に、美里を通る、首里、那覇、泊を描き、兼城照屋村の住人、国吉村の住人を

登場人物に入れ、真栄里村はずれ、むくひるの橋（報得川にかかる橋）まで与座大主は近づいたが、敵の神谷按司方

の勢いが強く完璧な防備であるので、現状では不利だと判断して引きかえして、久志の大浦大主を唯一の頼りにきわめて動的な展開になつてゐる。

「むくひるの橋」は、報得川にかかる橋のことと、東恩

納寛惇著『南島風土記』に、次のように記されている。

東風平村世那城に發し東流、糸満町に至り海に入る。約

二里、報得橋碑に、「兼城之東数百歩之地有長江焉、名曰報得」とあるものこれなり。今帰仁間切与那嶺村酬川獄由

來記に「ムコリガフ御獄」と見えたり、同格の名辞なるべし。石橋一座、古来首里那覇往還の要駅に当たり、もと木橋なりしが祭温執政中石橋に更む、享保十七年八月廿一日起工、十一月朔日竣工、工夫一万六千三百五十五人を要したと云う。

して急いだのであろう。

この組踊のタイトルの命名は、

大主

一 御主人の御為島国の為に一人すて、あろ心ざし。流石武士のとぢふどやある

大浦あじ

一 女身の君にこへな忠節や。昔からきかん働くと考え

（後略）

というあたりからつけられたものではなかろうかと考える。

登場人物は、次の通りである。

(1) 与座の大主

元の南山の城主大城按司の頭役。北山に按司の使いで出かけた留守中に、相役の神谷大主が、按司やをなぢやらを打ち死ぼし、城を奪いとつたことを聞く。怒り心頭に発しむくひるの橋（報得橋）までやつてきたが、神谷側の勢いを目のあたりに見て、ひとまず引きさがり、好機を待つべく、大城按司のいとこにあたる久志の大浦大主のもとへ身を寄せて、大浦按司の加勢をたのむ。

(2) 乙樽

与座大主の妻。神谷大主の謀反で按司やをなぢやら

かえして、好機到来を念じて、本島北部の久志に望みを託す。殺されたが、若按司は御内原に捨てられていたので、

抱きかかえてわが子の金松と一人をつれて、乙鶴を行し逃げのびる。しかし、二人をつれての逃亡はきびしく、困難であるので、わが子は普天間村の御宮の境内にする。そして わが子に御八幡大菩薩の奇特あらんことをお願ひする。

(3)、
乙鶴

大城若按司のあやあ。乙樽につきそい、若按司を守りながらおちのびる。

(4)、
真栄里のひや

元の南山の城主大城按司の臣下。主君亡き後、遠く山原に身をかくして人目を忍んでいる。しかし、闇の夜には、小舟を出して南山城まで行き、城の様子をうかがう。今は守備が堅く、飛ぶ鳥も落とすほどの勢があり、力が及ばないので、好機を待つしかないと考え、日々の生活のために喜瀬幸喜の山にはいり、猪取りをして暮らす。そのある日、乙樽・乙鶴が若按司をつれて山原にたどりついたのを、武富の子につかり、一緒に旅をしようといい寄られて、一人はこまりはてる。その場に出合った真栄里は、武富の所用をきき、所持する訴訟書を受け取り、切りする。

(5)、
武富の子

兼城照屋村の住人。南山の戦のあと暮らし向きが悪くなり、名護世富慶に住み、山工の働きをしている。

南山城から与座大主を捕まえたものに褒美として領地を望みのままにくれるという廻文、また、隠し置く者がいたら厳重に罰するという廻文があるが、与座は出でこない。この武富が捕らえてつき出し、領地をいただいていい生活をしたいと語る。真栄里にその訴訟書を見せてとりあげられ、切りすてられる。

(6)、
阿波根の子

国吉村の住人。与座の大主の妻乙樽が、わが子の金松を身替りに立てて、若按司を助けることを与座の大主や真栄里のひやに伝えるために久志に出かける。

(7)、
大浦の按司

元の南山の城主大城按司のいとこ。文武兼揃う当世の名将。与座の大主をはじめ、元南山城の旧臣たちの身元引受人であり、相談役。たのもしい後楯である。子宝に恵まれないので、首里からの戻りに普天間の御宮に立ち寄り、願をかけての帰りに捨て子を拾い、育てる。その子が与座と乙樽の一子であることをあとで知る。

(8)、
瀬嵩の子

大浦按司の家臣。按司のお供をして首里からの帰りに普天間の御宮に立ち寄る。

(9)、
南山の城主神谷按司

主君の大城按司やをなぢやら（夫人）を打ち「ぼし、

城を奪い取る。しかし、若按司の行くえや忠臣与座大主の身をかくしていることが気になる。廻文をたびたび出して、与座大主を捕らえたものに領地を望みの通りに与える旨を徹底する。若按司が久志の大浦按司のもとにかくまわれていることを人づてに知り、使いを出して即刻引き渡すよう申し出る。

(10) 吳屋のひや

南山城主神谷按司の家臣。按司の使いで大浦按司のもとへ行き、かくまつてある若按司を引き渡すよう要求する。もし渡さなければ、南山十五ヶの軍勢が責め寄せるなどを伝えて引きあげる。

全体は八段構成で各段落の内容は、次の通りである。

第一段、与座の大主の出羽

与座の大主は、主君大城按司が相役神谷大主に打ち亡ぼされ、城も奪い取られたことを、北山のつとめの帰りに聞く。神谷は智勇兼揃うつわものであるので、一人で敵打ちはかなわない。むくひるの橋までは來たが、引きかえし、主君のいとこの大浦按司を頼ろうと考える。大浦按司は文武兼揃う名将の誉れ高く、お家再興の加勢を願うに、もつとも最適の武将があるので、久志へ出かける。

第二段、乙樽の出羽

神谷大主が、去る十四日の夜八ツ時に、城に攻め入り、主君やをなぢやらをはじめ、多くの家臣を殺したこととのべ、唯一御子（若按司）が御内原に捨てられていたので拾いあげ、乙鶴をしたがえ、わが子金松をともなつておちのびる。普天間村の御宮まで来て、御子を助けてお家再興をはかるために、金松を境内にする。

第三段、大浦按司の出羽

大浦按司は、世継ぎに恵まれるようにと、首里からの帰りに御八幡宮に、願かけにきて拝みをすませたら、境内で男児の赤子が捨てられているのに出合う。供の瀬嵩の子らを、神からのさずかりと喜び、つれ帰る。

第四段、真栄里のひやの出、乙樽・乙鶴の出

大城按司の旧臣の一人である真栄里は、主君亡きあと、山原に身をかくして、闇の夜には小舟で南山近くまで漕いで行き、敵方の様子をうかがう。神谷側の警備は万全で、敵討は今はできぬと考える。日々の生活のため猪狩りに出る。一方、乙樽・乙鶴の二人は、御子（若按司）を抱いて、遠くの奥辺土へ下る。

第五段、武富の子の出羽

南山兼城照屋村の武富は、元の御世の話をして裕福であった頃のことをのべ、戦さのあとは名護世富慶で山工（きこり）をしていることを語る。与座の大主の消息を語り、南山の按司が与座を捕らえるものには、領地を望みのまま与えるという廻文を出していることをのべる。この武富が与座を捕らえてさし出すと語る。途中、休んでいる乙樽・乙鶴の美しさにみとれ、強引に声をかけて無理じいをしているところへ真栄里が割つて中にはいり、「ふてい男しき」を見つけたといつて射殺そうとする。武富は大事な用事で南山に行くので命をお助けと願い出る。与座の大主のことを知らせるためだというので、その訴訟書をとりあげ、切り殺す。乙樽と名のりあい、再会を喜び、そろつて久志へ向かう。

第六段、与座の大主は御子や乙樽・真栄里にあう。乙樽・真栄里、大浦にあう

与座の求めにより、乙樽は主君や夫人の最期、御子を御

内原で捨いあげ、大事に抱いて逃げのびたいきさつを語る。大浦按司は、金松を捨てた場所、月日時まで話してくれと頼む。乙樽の詳しい話で自分がお宮で捨い、今日まで育てていることを与座夫婦に語り、かえす。

神谷按司の命を受けて、大城按司の御子を引き取りに来た吳屋のひやは、大浦按司にことわられてもどる。その後、南山十五ヶの軍勢がすぐにでも責め込むことを伝える。大浦は、与座をはじめ多くの者をあつめ、いかにすべきかをはかる。与座は、わが子金松を御子の身替わりにたてることを申し出る。大浦は初め反対するが、夫婦の忠臣の深さに打たれ、金松を行かすことを認める。乙樽は金松を抱きあげて、急ぎ南山へのぼる。

第八段、阿波根の子の出

国吉村の住人阿波根の子は、与座の妻乙樽から内通をたのまれて久志へ行き、母子の状況を語る。与座は阿波根をためすため殺そうとする。阿波根は自分の誠意がとげられないならば殺して下さいと、忠実ぶりを申しあげると、与座はわびを入れ、良い方法を考えさせる。大刀打ちくらべを持ち出し、それをやつて途中で敵討ちをと話をかためる。

(結末欠損)

使用されている音楽は、第一段に口説。第二段に子持ぶし、東江ぶしの一曲。第三段に東立雲ぶし。第四段にきんぶし。第五段に東江ぶし。第六段に東江ぶし。第七段に伊野波ぶしがはいつている。長編物にしては曲数が少ないようと思われる。

山中湖の忠義
御事の爲めに城を下すの様子
大内より連絡の書
その内訳は
河野家が朝倉と連絡する
事に驚かれておる事
おもむかく信長が朝倉の死を知り
河野を攻めに来たのである事
その内訳は

アリスの前で落葉
落葉の神。アリス
落葉の封と御立所。
一人には落葉の御立所。
の落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。
落葉の御立所。

おれの氣が少しおかしくなつた
法事で高木様がおひるを取つてお
酒を飲んでいたのである。おひるを取つてお
酒を飲むのは、おじいちゃんの時からだ
今おじいちゃんは、おひるを取つてお
酒を飲むのが、おじいちゃんの時より多くな
づいてしまつた。おひるを取つてお酒を飲むの
は、おじいちゃんの時より多くなつた。
おじいちゃんは、おひるを取つてお酒を飲むの
は、おじいちゃんの時より多くなつた。
おじいちゃんは、おひるを取つてお酒を飲むの
は、おじいちゃんの時より多くなつた。

の事乙物と云ふ神、泥火事、火事欲、
ひかえ半夏辰火事、火事欲、
梅日節志と云ふ事、火事欲、
打よみの事、火事欲、火事欲、
酒、火事欲、火事欲、
立火事、火事欲、火事欲、
夜火事、火事欲、火事欲、
梅月の火事、火事欲、火事欲、
大月の火事、火事欲、火事欲、
乞人火事、火事欲、火事欲、
宿火事、火事欲、火事欲、

おこなひやれをうれしにほの重ね
月夜みゆきがる、城下包みの匂くも
あそびて、うるわの御城へかて、房のやのえ
清風のまのせれとれ、あとうへりあらゆるを
あらぢうらが景勝れり、ふるへりかのゆゑ
かなぬよの、夜をのぞきに、さきに
御宿場たまむ、旅意悲心のあゆ、旅舟す
ゑをうれしにうら。あるる江水を守る
たまきわづれど、あらまくいはる
旅宿れど、あらまくいはる

忠孝夫婦忠義

与座の大主

一此や南山の城主大城按司の頭役与座の大主。按司加那志御事と御慈悲ふかさあて。御万人のまちれ仰き拝みたん。あゝ去月の初比按司の御使に北山に越をたる留

主の内なかひ相役神谷の謀反企い。按司加那志をなさ

ら思子部までん。残らずに殺き城奪取ひ。南山の按司

と名乗てをんてやり。北山の戻り道中よをて聞ん。

あゝ口惜や殘念。主人失ひ一人生残て。朝夕胸内に煙

りたかよへか。直に走寄やひ討死に究め。むくひるの

橋迄や差越ひをたん。引帰ち得と考てみれば。智勇兼

揃てをる神谷の事やれは容易に討とよる敵や又あら

ん。殊に大勢の中に只一人取尋遂まらん生取ひにとら

りてや。武士の身の名折一時の怒り。漸にやめて心つ

くと思付る事や。按司の御従大浦の按司や。文武兼揃

て当世の名将。按司と御交ちむ深さ又あれは。片時も急ち久志に立越ひ。御加勢よ頼てかたき打とめて。御主人の恥名すゝきあけられてやり。顔やあミ笠にかくち出立ん

与座出羽口説

一 扱む此世に甲斐もなく。残るこの身そ哀れなれおもい

かへせは梓弓。直に大浦の城へとて。あミ笠ふかく顔かくし。行は程なく普天間村。御宮立寄伏拝ミ。当所権現御助に。願へ懸差給へとて誠尽して礼拝しおもへわすれと古里の。君や妻子の佛を夢に美里のさとも過ぎ闇に分き入久志越路。やいなまと大浦の城本に足をはやめて忍てちやる

与座大主

一 今日や夜もふけて御取次ならん。村に宿取やい明日のあけくに城本に登て按司よをかま

同人歌

一 うちくれしやなかひくれせやかさねとて夢の間の浮世暮さしん心氣

乙樽

一 哀れしれめしやうれなま出る我身や。与座の大主の妻乙樽とやよる。神谷の大主の悪欲よたくて。むちやる十四日夜の八ツ時ト。俄に大勢御城に寄て。按司加那志をなちやら御一門までん。内にまるまちり打よふろふされ。御子の前や御内原なかへ。捨られていまます我身の抱あけて戦にまきりやい御城よ立て。真栄里の

村はぢり原やとりなかへ。百、忍しのて御素立よしよ

すか。夫の大主と按司の御使に。去月の初比北山にい

まうち。今日廿日あまるまで音信ないらん。兎角あわ
り御主人の御仕合をかて。生ちよてんいらんてやりお

もい究めやい。あたらしか御肝乱りたらとめは。肝も

きもならんかにくれしやあるへつれなさや浮世ひちよ

ひ身になとて。我かなし子まで抱ちをしてや御子御素立

のならん。泣々むおめちやい金松よすて。御子守素

立御歳比ならは。かたち討めしやうらしよる跡々の願

や。女身よやてんおまんなよめ。大原になし子すゝて

居られめ。御八幡大菩薩奇特よあもの。此子行衛や御

守よ願て。宮にすてらてやり出て行ん。

同人道行子持ふし

一 御主人の御為島國の為に。おゑよん手はなさん玉金一
人子。思切ひするこの母のくれしや。神仏揃てあわ
れしりめしやちこの子行末やおミ守てたはうれ

乙樽

同人

一 義理の道やてとおめきやひをすか

一 是までよめはすて、戻らん心こらやミになるかしん
き



同人

一 あけやうあてなしのすてられる涯に。泣る母向て笑て
をる顔の。いちやしわすられか朝ん夕む

東江ふし

一 朝夕面影のいちやしわすられか哀此母や跡に残て

大浦の按司

一 やあ金松よ夢現心みすく聞留り。我が御主の御為泣々
むすて、あわれ母親や別て戻よもの。天の御定のこ
の生れともて。おとろしやもおもな母もおらめるな。
果報のあるやちは人にかまいられ々。犬まよのいしき
なよらとめは。

同人

一 御八幡大菩薩慈悲の御助に。此母のおもい哀知りめし
やうち。この子行衛や御見守てたはうれあ、たうど

一 出様うちやる者や大浦の按司。御八幡宮に願事のあと
て。二三日先に首里に登てをん。今日のよかる日に今
日のまさる日に御宮参詣に急ちいきん

同人

一 たうく御宮にちやん。急ち御供物よあけれ。やあ瀬

嵩子今日のよかる日に天氣までおちやて。参詣よ済ち

ふくらしやとあよろ

東立雲ふし

一 今日のふくらしや猶にしやなたてるつぶてをるはなの

露ちやたくと

瀬嵩子

一 めしやいる事。日柄から天氣頼たことかなて御参詣済
ちふくらしやとあやへる。

大浦のあじ

一 やあ瀬嵩のしあれに赤子泣こゑのあすいが。ふしき事
よ立寄ひんた

真栄里

一 是や大城の按司の臣下真栄里のひや。あ、主人失ひ古
里よはなれ。遠く山原に後かくちをとて。与所目かこ
れやい闇の夜になれば。小舟から南山に一人漕渡て。
城内の模様伺ひみれハ。おれくの備ひ不足なんあり
は。今程やかたち力及らん。いたつらに歳月送るしん
き。いちやんてやりきやしよか片時も急ち。日々當に
し、かりに出立ん

同人

一 あゝ。男子繁生平らに希て。はるくとこまに参詣の
折節。かにある引合やた、ならん事に。此子や誠御八
幡様に。我身に拝段疑やならん。あ、有難あ、たうと

同人

一 今日やまづ喜瀬幸喜山登てし、よまた

同人

一 やあ瀬嵩の子。よつき子求ミ願もとちて。今日の嬉し
さやものにたてら、ん押列で互にをとて戻ら

瀬嵩子

一 此間やこまに忍かくりとて。玉金御子御素立よしよす
か。あまか南山の城元に近さ。若かてきかたにさかし
出されて。御子諸共に殺されよすらは。思てをる願や

一 我れくよまでんふくらしやとあやへる。今日の嬉し
さやにをとて戻ら

あたならんしよもの。遠く国頭奥辺土に下て。与所目
かくれやすい節またんともて。御子のあなあ乙鶴よ列
て。またしらん島にとまいていちよん

一日も高さあもの。おやすミよめしやうり

武富の子

同人道行きんふし

一 奥辺土や東国のはてゝもの。てたあかるかたに思ひ定
めやい とまくにいちよる旅の道すから

一 恩納たけなかひ行衛白雲の。かゝてをすみれは哀旅立の
きんふし

一 おもことのまさでふたり袖ぬらち

乙樽

一 野山浦々に川橋も渡て。長路のつかり足本んやめは。
あよてあよまらんしはしやすま

乙樽

一 やあ乙鶴よ。長路のつかりあよまらんあもの。此松の
下にしはしやすま

乙樽

一 やあ乙鶴よ。長路のつかりあよまらんあもの。此松の
下にしはしやすま

一 此や兼城照屋村武富の子本やようふくに素立をたすか
近年所帶向のとりつ、からん。一節度世の為に名護世
富慶村に差越山工の働にとりかゝてをよん。いよる内
大城のあじの頭役与座の大主と按司の不仕合に付ては
切腹かしやらんけ済ちかをら抑行衛のしれらん。与座
と智勇兼揃てをる武士のことやらひ。南山の按司のい
つつかおるしもの若かたこまにかつこい済ちきよと打
出る□ならひ。むなしく仏となされろ積りむてん脈や
ひうろきにあかてさつかうに手ひしやたうれしつをる
様子。おの子細や月々の延文に与座の大主からめ出そ
ものや褒美として島知行望のまゝくいよん。若かくし
置ものや屹とおの咎あてによる段度々廻文差通しよんと
もむちや出らん。とつと込みいつちをる様子扱く人
間のふう果報や求めてん本めらん好てん好まらん誠に
天道事。与座こと、主人みハすてたらひ。こをから焼
出さつとるあまんとゑのものすまちかたまでいしつ。
久志んかいはいもつ来大浦の按司頼てかつくい済ちを
す幸にみい付たん。扱てもこれともとつ付てからに出
すは天下第一の手柄。やんともあり程のつわもやはれは
我々のよひ付やすつとんならん。至極残念におもて目

こはとて考むちやちやすや。かつくい取さへ訴訟申出

れは。早速迫て差遣はさてからめとらしよる積りやら

ひ。則此武富からめ出ちやすと同前。御褒美や島知

行望の候いた、ちよすやしれたも。おれからや一番や

屋敷結構二とり仕立しち。杷子ちんきよさや緬の衣裳。

武富

長幅たれくいと作られつは。腰袋出ち水たあひ貫かけ
印籠ちんきやくたうらんさけ。供に腰手されはなし笠
さつて那覇泊に差越る砌や。馬よ乗り加籠にかためら
れ誠生樂てる出ちくや此武富かたます。おりこれ思て

むては只今から大名の氣まへにてをん。此中首里の

下り登りの時あよまらんたる浜路山路も今日の登や車
たう原さあ一足もはやくいそかう

同人

一 あゝ。つくづくとむちむたひ二人共に相もおどらんち
やんいやらん姿た神か仏かむてとおまあるる。これふ
とのもにわかて登ていきやならん

一 やあく。長路のつかり足本もやみら筈袖のふらはし
と糸縁たう。下りともやらハ今日や此許田村に一宿し
つ。互ニ旅立のおもいかたらうやあ

同人

一 拠てもくありに居ちをる女や二人供にうちくしひ
姿。まつ急ちなからん一刻立寄てむたねはならん

与座妻

一 ミ拝とや、へすか急ち今帰仁に。と、かねハならん用
事たやへもの。日も高さあるうち先にとうやへら

同人

一 やあく。おの二人や鬼角首里那覇泊んかい登ていき

よら。これからさき多幸越路や一里余の山ミち。あま
いかは毛ふ、毛とりたつち中々おとるし所。沙汰もな
らん女わらへの通やならん幸。我ねん首里登りやこと
道つりさうやあ

武富

一 拠てもく木石相かわらん無情な女のちや。旅の者むて
肝くれしやおもて肝入しよす知らん。ふりきつちいち
よす中々合点いかん。さあ一人手のくひとつてそん
ちむちとまらしょん。

与座妻

一 是一人や首里方の士の妻子。用事あて今帰仁に下りた
やへる

与座妻

一 無理な事めしやうなよるちたふうれ

一 逃よらハにけれおしろから射よん

真栄里ひや

一 あ、みれは狼籍人立寄ひむた

同人

一 さてく幸なこと。ふてい男し、みつけたん。さらば

ひと玉に射りとめてとらさ

武富

一 されくし、やあやらん。

真栄里のひや

一 し、のものいすや別て奇妙をあ射りころきとらさ

武富のし

一 はあくあふなひく

真栄里

一 あたまから射らふかはらあて、射よめ

同人

武

一 あ、くくされく。肝要な御用筋持ち南山の城
に登ていちやへいもの。まつひらに一命御助めしやう
ちおたふいめしやいへり

真栄里

一 南山の城に急用やの事かやよら

武富子

一 大城の按司の頭役与座の大主と

真栄里

一 やあしはしまで

真栄〔里〕

一 やあ、此むちや只今おの仕付しよん。旅立の女先にと

をり

一 気遣やならん急ちいけ

同人

武富子

一 され訴訟書此とやる

真栄里のひや

一 因果の業のめくて我が前にちやん。さあ阿弥陀仏とな
て極楽よしやうれ

与座大主妻

一 やあ真栄里のひや

真栄里

一 やあおまねいよ

東江ふし

一 かに引合夢かやよら

真栄里

一 御子の前むをなちやらと御一所の御仕合やたら

与座妻

一 御子前や我身の抱ちあけて。戦にまちれやい御城よ出
て。百忍て御素立よしちゃん

同人

一 やあ乙鶴をかてこう

□

真栄里

一 やあおまねい天の御助神の引合に与座の大主ん大浦の
按司頼て。久志の城元にかくりやいいまんてやり。只
今のものから細々ときちやん。彼是の仕合御子の御果
報疑やないら。やあく哀此間の様々の憂日互に細々
とかたらひふしやあすか。こまや宿直人しけざあもの。
はやこ久志に立越い大主よいちやて共にかたら

乙樽

一 なまの事やれはふくらしやとあよるたうくいそかく

□

一 肝いさまいさて足よ早めてん。山路の習や寄てあよま
らん。やあ。大浦の城元や此とやよる

同人

一 たうく是に扣ていまうれ。御門番詰所むち尋ねやい

むた

与座

一 やあ御子

同人

一 御子をかみよすや夢かやよら

同人

一 親加那志御一所の御仕合ともて。朝夕さのくつき身に

あまたをたら。あゝかにある引合や夢かやよら

大浦のあじ

一 与座大主内儀始て

同人

一 真栄里のひやひさしよを

同人

一 やあ大主若按司これに

同人

一 あゝ。男振から姿あじにようにちをん。やあ大主此間

のなけき肝くれしやあたん。これからや打ふくて若按司よ素立やひ。かたき打とよる討ひ一篇におもひはまられ、

大主

一 めしや事。今日からや心はれくともちやい万事按司
加那志御慈悲希て。かたち打とよる討ひよしやへら

□

乙樽

一 やあ乙樽。按司加那志をなちやら御仕合時戦の半から
御子抱あけて。逃ちしので次第かたてきかす

□

一 去年の三月十四日夜の八ツ時ト。俄に大勢御城に寄て。
あじむをなちやらんころさりよめしやうち。哀御子や
我身の抱ちあけて。一涯の難や凌ちむきたすか。世界
やてきかたち一人身のならひ。我かなし子まで抱えて
や御子御素立のならん。泣こくもおめきやひ金松よ
すてゝ。真栄里の村廻り原屋込みをとて。此間や御子
御素立よしよたん。あまり南山の城元よ近さ。若かて
きかたにさかし出さりて。おもてをる願のあなたよら
とめは。やすてをひならんおめ付る事や。遠く国頭奥
辺土の村に。かくりやひをとて節またんともて。と

まくに二人下ろ道中に。真栄里のひやいきやてつり

てちやへたる

同人

一 瀬嵩の子。急ち虎千代さうてこを

大主

一 御主人の御為島國の為に思切ひ一人すて、あろ心さ
し。あゝ。流石武士のとちふとやある

瀬嵩し

一 をかん留やへて

大浦のあじ

一 女身の君にこへな忠節や。昔からきかん働くやよる。

やあ。すて子しやる場所月日時迄てん。あわれ細々か
たて聞す

乙樽

東江ふし

一 やあなし子

一 かにある引合や夢かやよら

乙樽

一 大原にしてよすや肝ならんあやへとて。去年の五月十
一日夜のあけかたに。御八幡宮にして、あやへいたん

乙樽

一 あわれ此間の夜々事の夢よ。替る事ないらんなし子す
かた

大浦のあじ

一 やあ去年五月十一日よかる日よやとて。男子繁生願事
の為に。はるくと御八幡参詣の折節。宮に男子す
て、置あれば難さおもて世つき子に究め。素立やひあ
んかたらよす聞は。すて子しやる場所月日時までん替
る事ないらん。やあ大主。若按司の為にして、ある金
松や。慥う虎千代に疑やないらん

大浦のあじ

一 忠節の誠ふかさあるよへと。かにある引合やめこてき
ちやる。やあ大主御八幡宮のおたすけに我身も。男子
繁生出来てをるおひや。世つち子の事や不足ないんあ
もの。虎千代や只今返ち渡しよもの。請取やひ二所の
跡につかされ、

□

のま

一 あゝたうと。長浜の真砂よミや尽すとん。按司加那志
御恩情かそてかそらりめ。此御恩一期ちじにかめやへら

同人

一 御門番衆御取次たのま

大浦の按司

一 やあ大主嬉しさもおふさなつかしやもあもの内にむち
互にかたであかさ

門番

大主

一 めしやいること互におかたらいよしやひら

吳屋

一 南山の按司の使に吳屋ひやか。よしれやひをる段按司
におんミよけてくいり

門番

一 此様おんミよけやへら

同人

一 御行合よめしやいんありにいまうれ

吳屋

一 国の浮沈ミ一大事の御使に。油断しや済ん急ちとをら
つか事と大浦の按司の抱置ある段按司のおぬによかて
悪人のなし子みよるしやひ置や跡々の障り御氣遣よた
いもの。ひきとやこをよてやり仰事をかて。はるく
と久志に下りて行ん

同人

一 南山の按司の使によしれやへたすや。主人大大城按司
と氣仕に暮ち。酒と色好ミ段々の暴虎。諸臣下の難儀
万民の苦ミ。あけてかそらん罪科のあとて。島国の為
に打果ちあすか。嫡子若按司御城元なかひ。御素立よ

同人

一 夜とをしに大浦の城元に着ん。まつ。門番に取次よた

めしやいてやり按司のき、及て。悪人のなし子差ゆる

くと御考よめしやうれ

ち置や。天道の御咎み忍らんあもの。急ち若按司引渡

大浦あじ

ちたはうれ。若御見立の替て御渡のないんあらは。南山十五ヶの大勢責寄ろ筈。おの時に御後悔益やないんあもの。得と此事や御思案よめしやいる。ことわけて御相談おんにゆけりてやり。はるくと使によしりやいちやへたろ

一 実よおんミよけて御聞わけならん。たとひ大勢責下る

とてん是非に及らん此までの運命。おめきやいをもの

急ち戻て。此やう按司御返答され、

大浦あじ

一 やあ呉屋のひや。大城の按司事と罪科の重およるしのないらん妻なし子まてん。殺さりてをる事や兼て聞をたん。嫡子抱置素立よる筋に。按司のおんミよかてなまの御使や。以外の事驚とる。兎角此事や人々の邪推おんみよかひ遺。神仏かけて為やあらん此様御落着のいまよろ事おんミけてたふれ。

呉屋

大浦

一 遠方御苦勞苦

同人

一 瀬嵩の子。内に出合の人数こまによへ

同人

一 慎につゝしみ重やいをる南山按司の。のよてかふくしこ使者よつかはしよか。やあ按司加那志悪人の跡方抱

置あたる。一旦のあやまち改よめしやうち。此涯に若按司御渡のあらは。過去どる事に御咎めやならん人止めしやいんてやり島国よふろて。御元祖に御不孝按司の御恥辱や。永々末代に流らんしよもの此事やつく

与座

一 御壁こしをとて委細聞へたん。極悪なやから権柄に任

ち。憚もしらん只今の使。あゝ。聞は腹立身振としやへる

大浦

一 やあ大主。呉屋の南山にと、きよすとかきり。追での
大勢しめ下る筈。急ちおりくの用意さり、

子。本の御城におんつかひ拝て。御掛ふさいめしやら
しよるかめ願よしよる。此涯にのよて女身ややてん。
かなし子に迷て義理よ背ちやへか。御究めの事に身替
に立てたふうれ

大主

一 やあ按司加那志。たとひしミミたろとてん。一旦の勝
や手の内とや、へすか。天の時得どる神谷の事やりは。
跡々災ひ大事あらんしよものなまをとて神谷の心やす
めやい。討て下さん計よしやへら

同人

一 やあ乙樽。御子御始我々よまでん。按司の御情にかく
りやひをるよひと。かたき打とよる計もななる。此御
恩たうとさや身にあまでをて。神谷と仇結てにこまり
よめしやうち。若か一大事の沙汰になり立は。按司の
御恥辱御元祖に御不孝。我々の科やかるからんありは
此涯に我身の思付ることや。なし子金松御子身替に。
てきの手に引渡ち一旦すミやひ。討手下さ、ぬ計にお
もひ究めたん身替ややてん義理の善悪や。おめわかき
こりよやあ乙樽よ

乙樽

一 朝夕わすりらん御主人のかたちいつか打とやい玉金御

大浦あじ

一 やあ大主勝負や武士のおくりてやすまん只今の計ひや
必ず取止にされ、

大主

一 やあ按司加那志。人助めしやんてやい討手引受て。此

御城元に大事のとんあらはわりくん所存懸やにな
らん慈悲共に我か願に任ちたふうれ大浦按司をなさら
大浦按司をなさら

一 やあ与座の大主。おしよん片時ん手なさんしちをて。
素立よる玉金てきの手に渡ち。あわり殺ろ肝の忍め。
いちやしかな別に計やいたふうれ

与座

一 やあ按司加那志。やあをなちやらの前。金松かことや
御八幡宮に。すて、あすあじの御助よめしやうち。御
素立にあふてすてをやひすか。兎角御主人の身替に立

る天の御定のおの生たいやへもの此の子のこと御氣

懸りめしやうち。此涯に願ひ御免ないんあれは。泣々
ん此御城元たち去ななよめ。平に此ことやよるちたふ

うれ

大浦あじ

一 あ、義理の思切や梓弓心。引よかへさらん此までよと
めは。心くらやミになるか心氣

同人をなちやら

一 とめてとめら、ん敵の手にやらち。いきやし此母や暮

きをよか

真栄里

一 御主人の御為一大事の事に。油断しや済ぬ夜通登よも
の。たうく金松渡ちたふうれ

乙樽

一 やあ真栄里のひや大主といやと二人より外に御子の御

腰立しよる人やをらん敵の手にいちやい殺されよすら

ハ。一人しち敵の討る計のなよめ。をてんやくた、ぬ

女わなやれはわか抱ひむじなし子諸共に死ハ。左ちや

の橋ひるこ極楽とやよる又と此ことや沙汰もするな

大主

一 やあ乙樽。いよる事よ聞ハ理とやよる。片時ん急ち南山にいちやい。此間や真栄里の原屋とくをとて。御主人の御子御素立よしやすか。世界やてき助けへもをらん。さかいし出されて殺すよへか。哀泣くも御子諸共に。よしれやへをる次第落着よしめり。たうく御主人の御為御めたちよりことに油断しやすまん気張て呉りよ乙たる

乙たる

一 御主人の御為思切やひをとて。露の身の命ち惜さおもやへめ。願のことかたち急き打済ち。天の御定の命ち待きめしやうれ。かねまつとわ身や御先むちをとて。

死出か山路に御待ちしやへら

乙たる

一 やあ按司そへ前やあをなちやらの前此間の御情けいつの世にわすやへか。後生迄ん御恩きじにかめやへら

大浦あじ

一 とめてとめら、ん是迄よとめは。別よる涯や袖のなめ

た

同人

一 やあ瀬嵩の子。陸路登よすや与所の見咎めんあもの。
急ち乗船の用意しめり

いのはふし

一 義理ともて互に思切へをすか

同人

瀬嵩の子

一 をかん留へて

舟筑

一 此瀬後りてや船やはらさんぬ。たうく急ち御供し
やへら

大浦

一 たうく急げく

伊野波ふし

一 誠こりまでの別れとめは

乙たる

一 やあ乙鶴よ。玉金御子龜相にしよめやすか。これ迄の
別れ頼て頼みよもの肝も肝添て念入ち呉りよ

乙つる

一 御子のことや御気遣よめしやな。此までよやれは哀な

きわかて。いきやし暮しやへか跡にぬくて

舟筑

一 御乗船廻ちきやへたん

同人

一 一大事な事やれは油断しや済。足よ早めやひ急ち通ら

乙樽

一 哀ふやかれやいつまてん名残。時移ち済んみやへらん

御暇よしやへら

同人

一 夜通しに大浦の城元にきやん

一 御門番衆御取次頼みやへら

門番

一 たるかやよら

阿波根子

一 与座の大主の妻乙たるか使に阿波根の子かよしれやひ

をる段。与座の大主にかたてたふうれ

大主

一 やあ阿波根の子思子諸共に殺さりてをることや差しり

てをすになまの事云すや。真栄里と武へ此御城元に。
かくれやひをとてかたき打取らぬともて。神谷の方便
に使かてある事や。居ながら委細合点とやよる。やあ。
はるくと使に下てきやる返礼に。与座の手に懸て極
樂よしめり

阿波根

一 やあ大主。御主人のかたき打取らんともて。ねぶる目

ぬねらん思つくちをてん。勢有るものに弓引やならん。
いたつらに此身年月よくらき。ふた心もたん阿波根か
心底御内儀の委細御取置のあて。大事の使に下てきや
へたる。やあ大主。かねまつか事と御子の御為。御八
幡宮に捨て置あたす大浦の按司の御助よめしやうち。
御素立に降てすてゝをる段。又此たひん御子身替に立
て。討て下さゝぬ御計の次第。御内儀の細にかたてあ
やへん。御祭のこととに神谷の使とんやれは。此程の御
内儀しる筈やあらん。此上に大主の御疑やらは。是非
に及らん是迄のいのち。使にきやる不祥殺ちたふうれ
谷の心打よるち。酒と色好みおくり日にまさて。御万
人の苦ミ極に究やいをもの。此折に重寄ひとんすらは。
一つ、ミニ打取よす手の内にあもの。此様委細おミニよ
けれでやり。御頼のあとてよしれやへたん

大主

一 やあ阿波根の子忠節の深さ有る段や。かねて差及んあ

たることやすか。あかりてた挙も人心やれは。巧てを
ることはから、んあてとこ、ろみに心底さぐて見ち
やる。あゝ。なまのことやれは誇らしやとある

大主

一 やあ真栄里のひや。阿波根の子。先方や大勢味方無勢。
名乗て責勝る働やならん。計事めくらしやい討とよる
事に。式人肝尽ち考てむて

兩人

一 をかん留やへて

□

一 めしやいる事。名乗て打勝る働のなよめ。此ことやつ
くくと考てめやへら。やあ大主。思付る事のわ身に
あやへすや。加治細工伊佐長浜かことと。抜群の細工
からとれくにいふもの。互に争争ひて大刀の打くら
べ神谷の目の前に決よる筋に二人からの願書出しそう
らは。城に召呼ひ見物よしる積り我々や細工人に姿た
引やつり風鑓のに大刀かたなしくて。勝負の半をて明
問伺ひ。討とよる計やいきやかあやへら

大主

阿波根

一 此事や二所御氣遣よめしやうな神谷よす、めやい日柄
究やひ。二三日内に通よしやへら

□

一 やあ大主やあ真栄里のひや。こまからや南山よ
た□ないんありはかたき打取る働やならん。

富名腰のひや事と義理立の重さ。按司かなし御仕合以
後宿に引籠て。神谷に奉公の所存心ないんあもの。片
時ん急奥武むらに引越し。供にてき打る用意しやへら
大主

一 奥武村やはなれ人目ないぬあもの急ち立越ひ富名腰と
かたらやひ。互にてき討る手組すらに

同人

一 やあ真栄里のひや。此事委細按司におんによけて。明
日のあけくにつれて登ら

一 はあ抑思付ん計とやよる。やあ阿波根の子神谷にいへ
合ち大刀のおちくらへ。見物よしめよすやなひかしよ
ら

よんむたぬ。やあく。壁□耳あとて風のものいふ。

一 指司加那志をなちやらに御暇ん済ち。片時ん急ち登て

いきよん

此世界よやりは□て□
よ□の御助に。かにある引合やめくてきやる
欠 落

□

一 やあ阿波根の子いやあや此から直く南山にいきやひ。

烈り登てちやる段乙樽にかたて。大刀のおちくらへ日
柄究やひ。一二三日内に差越いくを

阿波根

一 おかん留やべて

大主

一 たうく。万事気の付ハ勵ひくを

同人

一 やあ奥武村に着ん

富名腰

一 やあ大主やあ真栄里のひや。あゝ。一所の御尋夢やき

一 やあ真栄里のひやいや、大浦□
いきやひかた
き打取る御首尾お□かけれ。ありくに事の片付ハわ
身もよしれやい□
おんにゆけ□

以下欠落